

看護初学者のプロセスレコードからみるコミュニケーションの特徴

著者	林 智子, 井村 香積
雑誌名	三重看護学誌
巻	14
号	1
ページ	141-148
発行年	2012-03-15
その他のタイトル	The Characteristics of Communication of First-Year Nursing Students by an Analysis of Process Records
URL	http://hdl.handle.net/10076/11947

看護初学者のプロセスレコードからみる コミュニケーションの特徴

— 関心の向け方と自己一致 —

林 智子¹, 井村 香積²

The Characteristics of Communication of First-Year Nursing Students
by an Analysis of Process Records

Tomoko HAYASHI and Kazumi IMURA

Key Words: Regard, Congruence, Process-Records, Communication

I. はじめに

Peplau (1952) は患者との対人関係の内容を看護に生かすためには、患者とのやりとりを再現してみる必要があると考え、やりとりを再構成する道具としてプロセスレコードを考案した。プロセスレコードの特徴は、看護者の主観的な判断や自分自身の気持ちの動きに目を向けるよう求めていることである。つまり、看護者の言動が看護者のどのような思考や感情から導かれているかを知ること、看護者の関わりを看護として検討することができるものである (宮本, 2000)。

その後、プロセスレコードは Orland (1961) により改良され、広く用いられる理論となっている。その理論は「看護過程理論」と呼ばれ、患者と看護者のやりとりの過程は「患者の言動」「看護者の反応」「看護者の言動」という3つの要素に整理されている。その中の「看護者の反応」は、患者との接触によって看護者の内面に生じるものを指し、「患者の言動への知覚によって起こる思考」「知覚や思考によって起こる感情」に区分される。

さらに、Orland (1961) は看護者の反応を細かく検討することを提唱している。その手段として、自己の内面、すなわち「患者の言動への知覚によって起こる思考」「知覚や思考によって起こる感情」と一致する率直な言語的表現、すなわち「看護者の言動」を検討することである。彼女は、看護では患者が自分のニー

ドを言語によって率直に表現できるように促す必要があると考えた。そのためには、看護者自身が自己の内面と一致する率直な言語的表現をすることで、患者の率直な言語的表現を引き出すと考えた。

同様に Henderson (1969) も「看護師が患者の行動についての自分の解釈を患者と共有するならば、彼女の患者行動理解は非常に有望である」と述べている。それは、看護師が患者の言動から感じとった患者の思いを看護師の言葉で表現することによって達成される。つまり、看護師が患者の言動を受けて感じたり考えたりしたことを率直に表現することが看護として意味のあることだと考えられている。

一方、Rogers (1957) は、クライアントのパーソナリティ変容の必要にして十分な条件として、セラピストの3つの態度条件「自己一致」「無条件の肯定的関心」「共感的理解」を挙げている。その中で、「自己一致」は最も基本的な態度であるとされ、クライアントに対する否定的な感情が巻き起こってもそのことをセラピストは自己のなかで否認せず、経験し吟味することが必要であるとされている。つまり、セラピストは自分の感情、それがたとえ負の感情であってもクライアントに伝えることが必要なことであるとしている。

Orland (1961) や Henderson (1969) が指摘している「患者の言動を受けて感じたり考えたりしたことを率直に表現すること」は、Rogers (1957) のいう「自己一致」と同様の考え方である。つまり、看護でも

1 三重大学医学部看護学科基礎看護学

2 三重大学医学部看護学科基礎看護学

「自己一致」は重要であり、それはプロセスレコードという道具を使うことで検討できる。

プロセスレコードは、実際にあった患者－看護者関係の場面を看護者が後になって思い出しながら記録するものである。面接場面を録音して逐語録に起こす手法との違いは、プロセスレコードに書かれる内容がそれを書く看護者の記憶に依存することである。そのため、書かれた内容は主観性が高く、看護者の知覚に影響されたものとなる。つまり、内容が「患者の言動」であっても、それは「看護者が知覚した患者の言動」ということになる。さらに、最大の特徴は再生される内容が客観的な言動だけではなく、患者の言動に対する「看護者の感情・思考」という看護師の認知を記載することである。従って、プロセスレコードを記載しそれを活用することは、看護者の主体性を生かして知覚や認知を検討することになる。

これまでのプロセスレコードに関する研究は、学生の対人関係やコミュニケーションの傾向を報告したものや、プロセスレコードを記載したことによる学習効果など、プロセスレコードに記載された内容そのものを扱わない研究が多くみられる。一方、プロセスレコードの記載内容を検討している研究は、精神看護学実習で学生が困った場面をプロセスレコードによる振り返りを行った結果、学生の患者との対応傾向として自己の困惑した感情に気づくよりもその場の対処方法に関心を向けていることが明らかにされている（三原他，2001）。また、精神看護学実習でのプロセスレコードの記載内容を量的に検討した結果、学生は患者の内面にはあまり注目していないことが明らかにされている（山本他，2004）。

精神看護学実習での学生を対象としたこれらの結果から、学生の「看護者の感情・思考」での関心の向け方の特徴として、自己の感情や患者の内面への関心が低いことが示唆されている。看護師に必要なコミュニケーション能力の習得という観点から考えると、看護学を学ぶ初期からの取り組みが必要である。看護初学者である1年生が、初めての看護実習で記録したプロセスレコードの内容の「学生の感情・思考」から関心の向け方の検討と、さらに「学生の感情・思考」と「学生の言動」の関連から自己一致を検討することは、その後の看護基礎教育におけるコミュニケーション教育への示唆を得ることができるだろう。

そこで、本研究の目的は看護初学者が看護学実習において作成したプロセスレコードから、患者の発言への関心の向け方と学生の発言との関連の特徴を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 研究対象

2009年度の看護早期体験実習に参加した看護系大学1年生のうち、研究協力が得られた18名のプロセスレコードを対象とした。

2. 方法

看護早期体験実習は、1年次前期の毎週金曜日の午後180分を使用して行われた。その中に、3日間の病棟見学実習と1日間の外来見学実習が含まれており、プロセスレコードはそこでの患者とのかかわりの中で、学生が気になった場面を記載したものである。実習に先立ち、学生にはプロセスレコードの記載方法や考察の視点、自己一致の重要性などの講義がされている。

プロセスレコードの形式は、表面に「患者の言動」「学生の感情・思考」「学生の言動」の3つを分けて記入し、裏面にWiedenbach（1964）の以下の自己評価項目a～eに沿って考察を記入するものである。

- a. 再構成のために特にこの看護場面を選んだのはなぜか
- b. 患者にとって必要な援助を見極め、それを実施するために、自分の知覚、思考、感情をどう活用したか
- c. 自分のしたことを通して、どのような成果を得ようと試みたか
- d. 得られたような結果に至ったのは、どのような原因によるのか
- e. 再構成を行い、振り返ってみることによってどのような洞察を得たか

3. 分析方法

プロセスレコードとWiedenbach（1964）の自己評価項目a～eを熟読し、学生がこの場面を選んだ理由をもとに、着目すべき「患者の言動」「学生の感情・思考」と「学生の言動」を抽出し、それぞれを要約してコード化した。

「学生の感情・思考」は、学生の関心の向け方をその内容によって「患者志向」「関係志向」「自己志向」の3つに分類した。「患者志向」とは患者の感情や思考に関心が向いているもの、「関係志向」とは患者と学生の関係に関心が向いているもの、「自己志向」とは学生自己の感情や思考に関心が向いているものとした。さらに、学生の関心を「肯定的」「否定的」の2つに分類した。「肯定的」とは学生の関心が正の場合であり、「否定的」は負の場合である。つまり、《学生の関心の特徴》として、3つの分類に「肯定的」「否

定的」の2つの分類を合わせて6つとした。

また「学生の感情・思考」での内容を「学生の言動」で表出しているか否かを《関心の言語での表出》として「あり」「なし」で分類した。

4. 倫理的配慮

プロセスレコードの記載は、授業に組み込まれた教育内容である。研究用としての依頼は、プロセスレコードを授業で回収・返却したあとに、学生全員に研究の目的と方法、自由意思での参加の保証、匿名性の保証、プライバシーの保護、成績には関係しないことなどを文書と口頭で説明した。そして、同意が得られた者のみ再度、プロセスレコードを提出するように依頼した。

III. 結 果

プロセスレコードの場面は、病棟での場面が14件、外来の場面が4件であった。プロセスレコード毎に

「患者の言動」「学生の感情・思考」「学生の言動」の該当する部分をデータとして抽出し、コードとして示した(表1～表18)。

学生それぞれのプロセスレコードのコードと関係性を表19に示した。また、《学生の関心の特徴》の分類の度数を表20に示した。「患者志向」は10件(55.6%)、「関係志向」は3件(16.7%)、「自己志向」が5件(27.8%)であった。また、《関心の言語での表出》の分類では、「あり」が5件、「なし」が13件であった。

「患者志向」の10件は、「患者志向肯定的関心」が3件(16.7%)、「患者志向否定的関心」が7件(38.9%)であった。「患者志向肯定的関心」は、患者の発言から患者の状況を推測したものであった。その中で、《関心の言語での表出》をしているのは1件(#1)であり、推測した内容を表現し、それに関する質問を表現していた。また、「患者志向否定的関心」は、患者の不安や辛さなどの否定的な感情を推測したものであった。その中で、《関心の言語での表出》を

表1 #1のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	① ひととおり担当の患者さんの病気のお話を聞いたあと、「でも本当入院は暇でしかたないねえ」とおっしゃった。	② やはり今まで普通に生活してきた人がいきなり入院することになって、ストレスもたまってしまいうだろう。	③ 「そうですね。毎日、忙しかったところで、急にこの生活ですもの、退屈にもなりますよね。いつものようにして過ごしてらしたんですか?」
コード	① 入院生活は暇だという	② 普段の生活から入院生活になったのを想像してストレスも溜まるだろうと推測する	③ 想像した内容を話し、生活の実際を尋ねる

表2 #2のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと考えたこと	学生の言動
データ	⑮ 「でも、大盛りにはできるのはご飯だけだから、おかずとかとの比がね…」	⑮ 多分ご飯だけはすぐに量を変えられるからなんだろうな…	⑮ 「嬉しいようななんか複雑な気持ちですね」
コード	⑮ 大盛りはご飯だけであることを話す	⑮ 患者の言ったことの原因を考える	⑮ 患者の言ったことに対する自分の気持ちを表現する

表3 #3のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑩ 「でも、手術をしたりしているなら安静にしないって思うけど、私は内服薬を飲んでいるだけだから元気だし、早く動きたいのよね」と少し残念そうな様子。	⑩ やっぱ別患者さんに比べて、元気なんだな。でも、早く退院したそうだし、そうできるといいのにな。	⑩ 「そうですね。でも、家にいるときは、自分の時間ってなかなかとれないでしょうし、お休みだと思ってゆっくりなさってください」
コード	⑩ 早く動きたいという要望を述べる	⑩ 患者の要望から早く退院できることを願う	⑩ ゆっくり休養することを勧める

表4 #4のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑬ 「間食はダメですし、果物も食べられなくて…。それにやっぱり飽きますね」	⑬ そうだろうな。私だったらとても辛いだろうな。ストレートに辛い聞いてみよう。	⑬ 「そうですね。毎日同じ物ですものね。辛いですか?」
コード	⑬ 食事制限の内容と飽きることを話す	⑬ 自分だったらつらいだろうと推測し、それを伝えようとする	⑬ 患者を受け止め、辛いかを尋ねる

表5 #5のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「私たち患者は入院して知らない人ばかりで頼れるのは看護師だけなので、忙しいのも分かるけど、もっと患者を見て欲しい」	⑧ 患者さんは不安なんだと感じた。	⑨ 「そうですね、一人で入院して不安ですもんね」
コード	⑦ 看護師を頼りにしており、もっと患者をみて欲しいという要望を述べた	⑧ 患者は不安なのだと想像した	⑨ 想像した内容を述べた

表6 #6のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	① 「肩の腱を切っちゃってね、一週間くらい前に手術したんですよ。肩にボルトを7本入れたんですよ」	② 痛そう…。肩にボルトを7本も入れるなんて難しそうだね。	③ 「大変でしたね。でも、手術が成功して良かったですね」
コード	① 自分の手術の話をする	② 手術の想像をして難しそう手術だと推測	③ 患者を労い、成功してよかったという励ましの言葉を告げる

表7 #7のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑮ 「ご飯は自分で食べますよ。私くらの年で介護されるっていうのもあれなんで。ただ自分で食べますが、時間はかかりますね」	⑮ やっぱ介護されることに抵抗がある人もいるんだな。	⑯ 「でも、ご自分で食べられるならいいですね。時間がかかっちゃっても自分で食べられることはいいことだと思います。他に何か大変なことってありますか?」
コード	⑮ 食事は時間はかかるが自分で食べる。介護はされたくないから	⑮ 患者の抵抗という感情の推測	⑯ 患者の感情については言及せず、患者の状態への肯定的評価を表出

表8 #8のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「俺、3か月入院しているんだけど、本当にきつかった。薬が変わるたびに副作用が起って、本気で死にたいと思った」	⑧ 辛い思いをしてきたんだな。何て返事をすればいいのだろうか。	⑨ 「はい、そうなんですか、本当にきつかったんですね」
コード	⑦ 入院中のきつかった話、薬による副作用で死にたいと思ったことを話す	⑧ 辛い思いを想像するが、返事に困る	⑨ 相槌のような言葉を述べ、本当にきつかったという患者の言葉を繰り返す。

表9 #9のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「そうだね」タオルを探し始める。	⑧ 何か患者さんの不安がなくなるようなことを言ったりしたいけど、どうしたらいいかな。何ができるだろうか。	⑨ 「足を拭きましょうか?」と申し出た。
コード	⑦ 肯定し、タオルを探すような行動をする	⑧ 不安の除去をしたいと思うがどうしたらいいか困る	⑨ 足を拭くことを提案する

表10 #10のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	④ 「いちいち移動するのが面倒臭いんだ」 ⑦ 「別に毎日撮ったってからだの状態は変わっちゃいない。無駄なことをしているように感じるよ」	⑤ レントゲン室は結構遠くの方にあっただけからな。 ⑧ 治療のためなのに…看護師さんも大変だな。	⑥ 「けど、治療のためですし、しょうがないですね」 ⑨ 「きっとそんなことないと思いますよ。それに、明日は土曜日だからレントゲン撮影はないんじゃないですか」
コード	④ 移動が面倒だと理由を述べる ⑦ レントゲンに対する否定的な感情を述べる	⑤ 患者の発言の移動が面倒だという理由を推測する ⑧ 患者に対する否定的な気持ち	⑥ 治療のためだから仕方ないと患者を説得しようとする ⑨ 患者の発言を否定する

表 11 #11 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「一番いいですよ。看護師さんの対応もよくて、優しくて…本当にいい病院ですよ」	⑧ よかった。答えてくれた。でも、話が途切れちゃう。沈黙はまずいから何か話さなきゃ。どうしよう…。Aさんも困っているかも…	⑨ 「そうなんですか…」と少し沈黙になってしまった。
コード	⑦ 病院に対する評価	⑧ 話が途切れそうになり困惑	⑨ 患者の答えに相槌を打つ程度の反応

表 12 #12 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑬ 「そうだよ。今日は話し相手がいるからいいけども、いつもは売店を見に行き、前に入院してたこともあったから2階とかの病室の方も回ったりして時間つぶすんだもの」と言いながら笑った。	⑭ 私のことを迷惑だと思っていないのかな。前に入院したこともあったんだ…。○大病院のことは私よりも詳しくさな。	⑮ 「売店などもよく利用されるんですね。いつ呼ばれるか分からないからあまり遠くには行きませんね」
コード	⑬ 外来の待ち時間での時間のつぶし方について話す	⑭ 自分のことを迷惑ではないか心配している	⑮ 時間をつぶすことに関して自分の意見を述べる

表 13 #13 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑩ 「食事かぁ。う～ん、まあ、やっぱり病院のご飯はね、おいしいとは言えないよねー。メニューが選べるようになればいいんだけどな。しょうがないんだけどね」	⑪ どこまで聞いてもいいのかな。あんまり質問するのも良くないよなあ…	⑫ 「あーやっぱりそうですね。食事は楽しみですからね」
コード	⑩ 病院の食事の感想と希望を述べる	⑪ 患者の話に対して質問してもいいのか悩む	⑫ 患者の言葉を受け止め、質問をせずに自分の感想を述べる

表 14 #14 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「18にならないうちに戦争に行ったんだよ」	⑧ じゃあ、やっぱり家族の人がここまで車に乗せてきたのかな？	⑨ 「ここまではどうやって来られたんですか？」
コード	⑦ 戦争のことを話題にする	⑧ 戦争の話題に関係のない家族の人が車に乗せてきたのかという疑問	⑨ 交通手段を尋ねる

表 15 #15 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑨ 「手術は1か月前に終わっているから」	⑩ えっ、○大病院って3～4日ぐらいで大体退院するって聞いたけどな…。例外？	⑪ 「そうなんですか。じゃあ、入院生活長いんですね」
コード	⑨ 手術のことを話す	⑩ 入院期間のことに関心を示す	⑪ 気になった入院期間のことを尋ねる

表 16 #16 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑦ 「うん。もう1年半になるかな。私の病気はね…」病気の話をし出す。何でも難病らしく、治療も上手くいってないらしい。少し悲しそう。	⑧ うわ。どうしよう。なんだか、不味いことを聞いちゃったかな。難しい病気なんだ。どうしよう。何か明るい話をした方が良さそう。	⑨ 少し困惑の色が声に出してしまう。「そうなんですか…。私はまだ1年生で何も学んでいないので上手く言えませんが、きっと良くなりますよ」
コード	⑦ 入院期間の質問をきっかけに難病で治療が上手くいっていないことなど病気について話した	⑧ 悪い病気の話に動揺し、別の明るい話を望んでいる	⑨ 自分のことを弁解し、患者が良くなると告げる

表 17 #17 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	① 「私、去年のほとんどをここで入院してたんですよ」	② うわあー、なんか反応に困るなぁ…。どこまで聞こう？	③ 「そうなんですか。入院生活ってつまらなそうですね。何をして過ごされましたか？」
コード	① 長く入院していたことを話す	② どこまで聞いていいのか反応に困る	③ 入院生活に対するネガティブな印象を述べ、患者にどのように過ごしたかを質問した

表 18 #18 のデータとコード

	患者の言動	学生の感じたこと・考えたこと	学生の言動
データ	⑬ 「でもね、今はカツラをしてるの。これであんまり目立たないよ」	⑭ これから何て言えばいいんだろう。でも、自分の髪は抜けているんだよね。変な会話だ…。何て返せばいいんだろう。	⑮ 「いいですね。でも、回復してきているから、これから生きてきますよ」
コード	⑬ 脱毛の対処としてカツラをしていることを言い、目立たないという	⑭ 返答に悩む。脱毛していることに拘っている	⑮ 回復して髪の毛が生えてくるとい

表 19 プロセスレコードのコードと関係性

#	場面	学生の感情・思考のコード	学生の言動のコード	関係性	
				学生の関心の 特徴	関心の言語 での表出
1	病棟	入院という患者の状態の想像	入院という患者の状態を想像とそれに関する質問の提示	患者志向肯定的	あり
2	病棟	患者の発言した内容に対する学生の解釈	学生の解釈した気持ちの表出	患者志向肯定的	なし
3	病棟	患者の発言から患者の退院したいという要望を想像	入院中はゆっくり休養することを勧めた	患者志向肯定的	なし
4	外来	患者の行っている治療に対する辛さの推測	辛さを提示して決めつけた対応	患者志向否定的	あり
5	病棟	患者の言った要望を患者の不安に置き換えて想像	想像した不安の提示	患者志向否定的	あり
6	病棟	患者の話の手術に関する難しさの想像	患者への労いと励ましの言葉の提示	患者志向否定的	なし
7	病棟	患者の抵抗という否定的な感情の推測	患者の感情への言及はなく、患者への肯定的評価の表出	患者志向否定的	なし
8	病棟	患者の発言から辛い状況や気持ちを想像	相槌程度の反応のみ表出	患者志向否定的	なし
9	病棟	患者の発言から患者の不安を想像	足を拭くという現実的な対応を申し出	患者志向否定的	なし
10	病棟	治療に消極的だという患者に対する否定的感情	患者への説得の言葉の表出	患者志向否定的	なし
11	病棟	患者との話が途切れるのではないかという困惑	相槌程度の反応で患者の発言内容への言及はなし	関係志向否定的	なし
12	外来	自分が迷惑でないか心配	患者の発言をきっかけとしたあらたな自分の考えの表出	関係志向否定的	なし
13	病棟	患者にどこまで聞いていいのかという戸惑い	患者の発言への同調と自分の考えの提示	関係志向否定的	なし
14	外来	患者の発言に関係のない学生の関心からの疑問	患者の発言に関係のない学生の関心からの疑問の提示	自己志向肯定的	あり
15	病棟	患者の発言に直接関係のない入院期間に対する関心	学生自身の入院期間に対する関心を提示	自己志向肯定的	あり
16	病棟	悪い病気の話に対する自分の動揺	根拠のない励ましの言葉の提示	自己志向否定的	なし
17	外来	患者の発言に対する反応に困惑	入院生活に対する自分の否定的な印象の提示	自己志向否定的	なし
18	病棟	デリケートな問題に触れたことの後悔と拘り	根拠のない励ましの言葉の提示	自己志向否定的	なし

表 20 学生の関心の特徴

学生の関心の特徴		度数 (%)
患者志向	肯定的関心	3 (16.7%)
	否定的関心	7 (38.9%)
関係思考	肯定的関心	0 (0.0%)
	否定的関心	3 (16.7%)
自己思考	肯定的関心	2 (11.1%)
	否定的関心	3 (16.7%)

しているのは2件（＃4、5）であり、推測した辛さや不安を表現していた。また、表出していない5件で表出していた内容は、推測した患者の感情ではなく、「労いや励まし」（＃6）、「肯定的評価」（＃7）、「相槌」（＃8）、「現実的な対応」（＃9）、「説得」（＃10）と様々であった。

「関係志向」の3件はすべて「関係志向否定的関心」（＃11～13）であり、患者との関係が悪くなるのではないかという推測であった。《関心の言語での表出》をしているものはなく、困惑や心配しながらもそれを表出していなかった。

「自己志向」の5件は、「自己志向肯定的関心」が2件（11.1%）、「自己志向否定的関心」が3件（16.7%）であった。「自己志向肯定的関心」の2件は、患者の発言に関係しない学生の関心からの疑問（＃14、15）であった。その2件とも《関心の言語での表出》をしており、学生が考えた内容を表出していた。また、「自己志向否定的関心」の3件は、「自分の動揺」（＃16）、「困惑」（＃17）、「後悔と拘り」（＃18）であった。3件とも《関心の言語での表出》をしておらず、「励ましの言葉の提示」（＃16、18）、「自分の否定的な印象の提示」（＃17）であった。

IV. 考 察

プロセスレコードの「学生の感情・思考」を分析した《学生の関心の特徴》では、「患者志向的関心」が半数を超え、最も多かった。その中でも「患者志向否定的関心」が4割近くを占めており、学生は患者の不安や辛さなどの否定的感情を推測していることが示された。このことは、患者の発言から患者の内面に否定的な感情が推測されるとき、学生はそれを敏感にキャッチしていることが推測される。山本らの研究では、3年次の学生は患者の内面にはあまり注目していないと述べており、今回の1年生とは異なる結果であった。これは、3年次の学生が精神看護学実習であったことと関連しているのかもしれない。精神疾患をもつ患者の内面の推測が難しいことも考えられる。

また、《関心の言語での表出》は2件で見られ、推測した辛さ（＃4）や不安（＃5）を表現していた。＃4では「患者の行っている治療に対する辛さ」を推測しそれを表現しているが、それに対し患者は「別の表現」で心情を表現しているにも関わらず、学生は「辛いに違いない」と決めつけた対応になってしまっている。学生は患者の心情を一旦「辛い」と推測するとそれに固執してしまい、本当にそうなのかを患者に確認することができなくなってしまうのではないだろうか。この場合、《学生の関心の特徴》は患者志向という特徴をもち、《関心の言語での表出》もしていることから、自己一致ができていると考えられる。しかし、学生の対応は決めつけた対応になってしまっており、望ましい対応とはいえない。プロセスレコードの分析では、関心の向け方と関心の言語での表現だけでなく、患者の心情推測の適切性も検討することが必要であるだろう。

さらに、「患者志向否定的関心」で、治療に消極的だという患者に対する否定的感情（＃10）がみられ、学生の言動は「患者への説得の言葉の表出」となっており、《関心の言語での表出》はできていない。これは、学生自身のプロセスレコードの考察に、「できるだけマイナスな気持ちを表現しないようにした」とあり、患者に対する否定的な気持ちを隠して対応する典型的な自己不一致にあたると考えられる。学生は患者へのマイナスな気持ちを隠そうとしたために、説得という望ましくない対応になってしまったと考えられる。この学生は患者に対する自分の否定的感情には気づくことができているため、それを隠そうとする対応ではなく、感情を吟味し、表現していけるような教育的関わりが必要であろう。

「関係志向」3名は、すべて「関係志向否定的関心」であった。これは、看護初学者である1年生が初めて臨地実習へ行き、患者との話が途切れるのではないかという不安を表している。《関心の言語での表出》はすべてなしであり、話が途切れるのではないかという学生の不安は、表現するに値しないと考えているのだろう。しかし、患者の話を聞きながら、話が途切れるのではないかという患者の話とは別のことを考えることは、患者の話をよく聴くことができない原因になると考えられる。学生が患者の話をよく聴けるようになるためには、話が途切れるのではないかをいう不安を表出し、それを克服して患者との会話に臨むことが必要ではないだろうか。

「自己志向肯定的関心」2名は、患者との会話の中で、患者の話をきっかけとしてはいるが、患者の話した内容とは違う学生の関心による質問が考えに浮かび、

それを提示していることが特徴である。つまり、会話が患者主体ではなく、学生主体で進行している状態である。これは、《関心の言語での表出》はできているため、自己一致していると考えられるが、関心の向け方が患者ではなく自分に向いていることが課題である。

「自己志向否定的関心」3名は、患者の悪い病状に対して動揺や困惑を感じており、それを表現しないようにしようとして、「良くなりますよ」という根拠のない安易な励ましの言葉を発してしまっている。この安易な励ましは、動揺している自分を落ち着かせるための言葉であるのかもしれない。患者に励ましの言葉をかける前に、学生は自分の動揺や困惑の気持ちと向き合い、感情を吟味し、それを表出していけるようにする必要がある。

V. 結 論

看護初学者が看護学実習において作成したプロセスレコードから、患者の発言への関心の向け方と学生の発言との関連から自己一致を検討した。患者への関心の向け方では、関係志向や自己志向では患者と会話をしていても、患者の話を聴けていない可能性が示唆された。一方、患者志向であることは患者の話を聴ける可能性が高いが、患者志向で自己一致ができていたとしても、学生の推測した患者心理による決めつけた対応になる可能性が示唆された。関心の向け方と自己一致だけではなく、心理推測の適切性への配慮も必要で

あることが示された。また、典型的自己不一致として、患者に対する否定的関心で、それを隠そうとして説得という望ましくない対応となっていた。学生が自分の感情と向き合い、それを吟味し、表現していけるような教育的な支援の必要性が示唆された。

引用文献

- Henderson, V. (1969) 湯慎ます, 小玉香津子訳 (1988): 看護の基本となるもの, 17, 日本看護協会出版会, 東京
- 三原重矢巳, 多喜田恵子 (2001): 学生が困った場面を振り返ることの学習効果—精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析より—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 1, 63-71.
- 宮本真巳 (2000): 看護場面の再構成, 2-13, 日本看護協会出版会, 東京
- Orland, I. J. (1961) 稲田八重子他訳 (1964): 看護の探究—ダイナミックな人間関係をもとにした方法, 62, メヂカルフレンド社, 東京
- Peplau, H. E. (1952) 稲田八重子他訳 (1973): 人間関係の看護論, 15-16, 医学書院, 東京
- Rogers C. R. (1957) 伊藤博他訳: セラピーによるパーソナリティ変容の必要にして十分な条件, ロジャーズ選集 (上), 265-285, 誠信書房, 東京
- Wiedenbach (1964) 都留伸子訳 (1972): 臨床実習指導の本質—看護学生援助の技術, 160, 現代社, 東京
- 山本勝則, 吉田一子, 内海 滉 (2004): 看護場面における他者理解と自己理解との関連, 保健科学研究誌, 1, 27-33.

キーワード: 関心, 自己一致, プロセスレコード, コミュニケーション